太宰府の文化財 (201)

五条の構口（かまえぐち）

江戸時代　五条二丁目所在

五条交差点周辺の道路拡張工事に伴う発掘調査によって江戸時代の構口の跡が見つかりました。（写真①）

①発掘調査によって出土した五条構口の基礎石

構口というのは江戸時代、宿場の出入り口に作られた土塀（どべい）で、防衛的機能を持っていたと考えられます。

構口の構造は『二日市宿庄屋覚書』によると「練塀（ねりべい）の下地根石を築き立て練塀に仕上げ瓦葺（かわらぶき）となし申し候」で、石垣の上に練塀を築き、漆喰（しっくい）を塗って白く化粧し、その上に瓦を伏せた土塀でした。その土塀を宿場の出入り口に当る場所に道の両側から3尺（約90㎝）くらい突き出して築きました。関所のように門や柵は付けられていません。現存する構口が筑紫野市の山家（やまえ）にあり、その形がよくわかります。（写真②）

②宿場の内側から見た山家の構口

今回見つかったのは、そんな構口の基礎部分でした。一列に並んだ石垣の基礎石が出土しました。残念ながら道路の方へ曲がっているのは今回の調査ではわかりませんでした。

ここは二日市方面からの入口で、藍染川（あいぞめがわ）を渡った所に構口があったことが江戸時代に描かれた屏風（びょうぶ）や地誌の挿絵で推定され、昭和40年代まで、そのなごりの土塀が家の塀として使われていたらしいのですが（写真③）、今回その場所がはっきり確認されたわけです。

③五条構口のなごりの土塀（昭和30年ごろ撮影、吉塚太喜雄（よしづかたきお）さん提供）

前述の資料によると、ここは五条口と呼ばれたようです。ただ、『太宰府旧蹟全図』という絵図では「タカハシ口」という名になっていますが。

ところで宰府宿には他に三カ所の構口がありました。この五条口の近くで博多方面からの入口にあたる道（現在は県道）が御笠川を渡った所に高橋口（旧蹟全図ではハカタハシ口）の構口、北の方では宇美方面からの入口である三条の三浦橋そば、もう1カ所が甘木方面からの道で、現在の馬場公民館あたりの溝尻（みぞしり）に築かれました。そして、前述の『二日市宿庄屋覚書』によると、高橋口の構口は宝永（ほうえい）7年（1710）に作られたことがわかります。

車社会の到来とともに姿を消した構口でしたが、ひっそり地下で在りし日の賑やかな往来を思い出していることでしょう。

太宰府市役所:〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121 FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 ⑳②

牛車天神図　一幅

大きさ　縦85.6㎝　横40.6㎝

紙本着色　　光明寺蔵

牛車に乗って太宰府に下る菅公を描いた図に、禅僧が賛をしたためた一幅です。

賛とは事物をほめたたえる詩文のことをいいますが、特に絵画史では、画面の余白に書かれる画や画の題材をほめる詩文のことを指します。この図では関州舜圃という曹洞宗のお坊さんが賛を書いています。

賛文の内容は、度量の狭い小人の讒言によって菅公が左遷され、59歳で亡くなったこと、その300年後に忽然と表れて、中国の径山の仏鑑禅師無準和尚のもとに参禅し、法衣を授かったこと、この話は日本で多くの人が伝えていることなどです。書かれたのは室町時代の天文14年（1545）のことです。

賛を書いた関州舜圃は出身はわかりませんが、甲斐（山梨県）の曹洞宗の寺々の住持を務め、賛に書かれた「前永平龍石中興」の文字から福井の永平寺に入り、龍石寺の中興を行った人だということです。

さて絵の方ですが、この図を納めている桐箱に貼られた紙には「秋月筆」と墨書されています。秋月という絵師でこの時代の人を探してみると、秋月等観という人が出てきます。生没年不詳なのではっきりはしませんが、1490年ごろ雪舟の弟子ですし、永正年中（1504～1521）に活躍した人と伝える本もありますので、可能性はあると思います。

この秋月は薩摩の島津家に仕えた武士でしたが、山口にいた雪舟の弟子となり禅僧で画家となったということです。雪舟と共に明（中国）に渡り、帰国後九州地方に雪舟の画風を広めたということです。しかし雪舟より分かり易く、彩色も豊かで独特の画境を持っているそうです。この絵が秋月等観の筆かどうかわかりませんが、当時の縁起や物語に見られる素朴な味わいのある絵です。

天神さんが仏鑑禅師のもとに参禅したという渡唐天神ゆかりのお寺にふさわしく、その話が賛としてしたためられたこの図が伝わっているのでしょう。

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121　FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。

R100

太宰府天満宮絵馬堂の絵馬

曳馬図　1面

江戸時代　上田主英筆　太宰府天満宮所蔵

▲曳馬図　杉材　縦206cm　横285.3cm　「画官　上田主英図之」銘

1頭の馬とその手綱を持った唐服の人物が描かれ、馬の首筋や背に残る線は力強く伸びのある筆使いです。

この絵馬は江戸時代の文化14年（1817）に上田主英によって描かれました。上田主英がどのような絵師であったか、はっきりしたことはわかりませんが、福岡藩主黒田家に仕えたお抱え絵師に、上田姓があり、その系譜につながる人とも考えられます。

上田家については、元禄ごろ（1688〜1703）上田多兵衛、上田永朴主常（上田権太郎）などの名がまず出てきます。永朴主常は狩野昌運の門弟とも、昌運の師狩野永真の子永叔の門人だったとも言われます。そして後に、狩野養朴常信の弟子になったと伝えられています。享保3年（1718）の国絵図や、同5年の筑前を中心とする近隣地域の方位絵図の制作の際、「絵図書」として関わっています。久留米梅林寺の竜虎図屏風、福岡円覚寺の墨梅図屏風、福岡幻住庵の鷲図、福岡海蔵寺の聖一国師像など彼の作例と考えられています。また新宮町の新宮神社（上府）に奉納された絵馬には「宝永三年（1706）狩野門弟上田氏筆」の銘が残っています。長男は代六主親ですが、その事跡はほとんど知られていません。

元文2年（1737）の志賀島荘厳寺の涅槃図、寛保2年（1742）の博多聖福寺に残る実巌素快像、承天寺の笑岩円粲像は上田主治です。東区奈多の志式神社には「延享三年（1746）狩野法眼門弟上田主勝筆」の三番叟図絵馬が、甘木市の豊前坊社にも宝暦8年（1758）の主勝筆の絵馬があります。

宝暦4年（1754）の山笠絵図は上田権之丞。明和4年（1767）の福岡香音寺の十六羅漢図は上田主香。

文化14年（1817）の福岡藩の分限帳の絵師の項に禄高「拾七石四人　上田佐吉」の名が、万延元年（1860）の分限帳には「一六石四人扶持　上田右兵衛　地行」と記されています。佐吉は文化年間に山笠本絵図を描きました。

ところでこの絵馬の作者主英ですが、同じ作者名で文政11年（1828）の三番叟図絵馬が西区の宮浦の三所神社に、年代・題とも不詳の絵馬が博多区下月隈の八幡宮に残されています。

上田英信銘で天保8年（1837）と翌9年の絵馬があります。8年は南区横手の宝満宮に、9年は博多区山王の日吉神社に駒引唐武人図として残っています。「画官上田英信図」という署名の書き方など主英とよく似ています。

ほかに安政6年（1859）、文久2年（1862）銘の絵馬を描いた上田桂圃という人もいます。

どの人がどうつながるのか、系譜は今後の課題です。

㈶古都大宰府保存協会

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 204

戒壇院本堂の聯

江戸時代　戒壇院

▲戒壇院本堂内（本尊の両側の柱に聯が懸かっています）

▲壇の前の柱に懸かる聯

▲後屏の柱に懸かる聯

戒壇院本堂の本尊が安置されている台座（須弥壇）の後は白壁の後屏ですが、その左右の柱に漢文が記された細長い板が懸かっています。聯と呼ばれるもので、須弥壇が置かれた石の壇の前の柱にも、もう一対下がっています。

聯というのは柱や壁などの左右に、相対して掛けて飾りとする細長い書画の板のことで、中国で始まった風習の一つです。２枚つまり２句でひと組の表現なので、両句は必ず同字数で、全体的にも部分的にも、また意味上、語法上、同一構造であることを要し、それぞれが対になるように作られています。

たとえば後方の柱に懸かっている聯では潔と浄（名詞句）、似と如（動詞）、瑠璃盞、寶月輪（３字の名詞）が対になっています。聯の種類はいろいろで、お正月用（春聯）、結婚祝賀用（婚聯）、長寿祝賀用（寿聯）、死者の哀悼用（挽聯）、あるいは名勝や古跡をたたえる聯もあります。中国では現代でも生活の中に生きています。

さて戒壇院の聯ですが、まず後屏の柱に懸かるのは延宝元年（１６７３）に元浦玄珠の娘が奉納したもので、句は中国の僧柏岩が書いています。

「潔似瑠璃盞」「浄如寶月輪」

—潔きことガラスの盃に似、浄きことは輪のように丸く美しい月のようである—

柏岩というお坊さんは調べてみましたが、どのような人物だったか、調べきれませんでした。ただ想像するに禅宗黄檗派の僧だったのではないかと思うのです。というのは昨年の11月の１９８号で戒壇院の扁額を取り上げたときにお話ししましたが、江戸時代、黄檗趣味といわれる黄檗派の僧たちの書や詩文が流行し、寺でも扁額や聯に刻んで堂内外を飾ったということです。戒壇院の扁額は延宝２年（１６７４）の奉納で、黄檗僧の木庵性瑫の揮毫ですし、これらを考えると、柏岩は中国から来た黄檗派の僧の一人だったのではないかと考えるのです。柏岩に関する情報がありましたら、お知らせください。

壇の前の柱に懸かる聯は、博多聖福寺の仙厓和尚の書を天保６年（１８３５）５月福岡湊町（現福岡市中央区荒戸あたり）の八百屋惣右衛門が自ら彫って納めたものです。

「聖武敕壇和會三國以築」

「鑑眞結界開顕四分以成」と

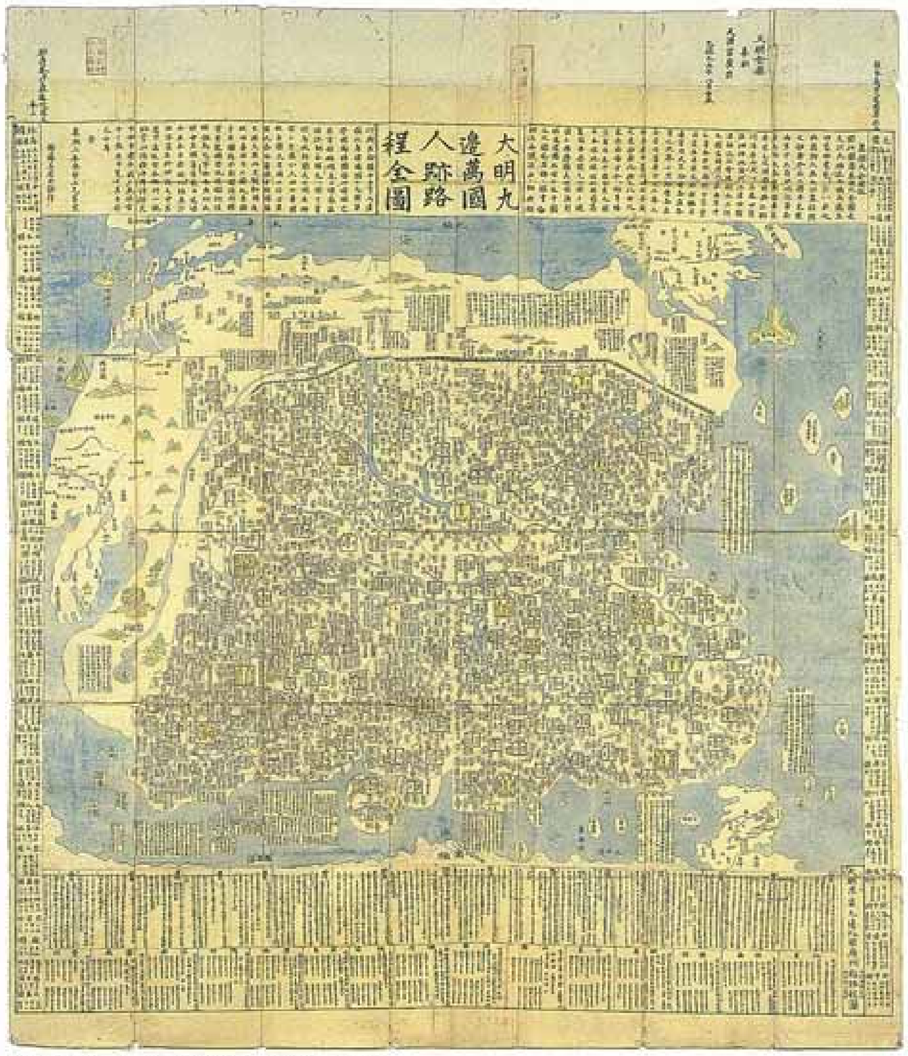
戒壇院を称えています。仙厓さんはこの年、86歳。聖福寺の住職を譲った湛元が藩の怒りにふれ大島流罪となったため、再び聖福寺の住職につく前年であり、亡くなる２年前のことです。仙厓さんについてはまた項を改めて。

(財)古都大宰府保存協会

太宰府の文化財 205

大明全図

江戸時代　太宰府天満宮所蔵



▲大明全図　縦140.6cm　横121.3cm

「大明九辺万国人跡路程全図」と書かれた写真の地図は、中国の清で康熙2年（1663）に発行された「天下九辺万国人跡路程全図」を日本で前記の名に替えて出版されたものを、松寿庵竹森道悦が模写し、熊本義里入道円斉が彩色して、元禄9年（1696）に天満宮に奉納したものです。

地図の構成は中国内の府州県（行政区画の名称で、州・県は府に属した）を記した部分がほとんどを占め、そのまわりに周辺の国を四角の囲みに入れて配置し、大陸のまわりを海が巡っています。

地図の四辺は、上部に地図の表題とこの図全体の説明を、下部は中国の各省ごとに府の数・名称、州県の数、他の省からの距離、産物とその量などを記した一覧が、右側は九辺つまり国境近くの関や城、鎮を書き上げて、ごく簡単な説明と都からの里程を記しています。左側の欄は外国つまり周辺諸国ごとの位置と北京からの距離を載せています。

さて地図を良く見ると、北（上）の方にギザギザの線が続いていますが、これは万里の長城です。長城の外、北西の海近くには「韃靼・沙漠」とあり、モンゴルとゴビ砂漠でしょう。西南隅には黄河の源流と考えられていた星宿海が描かれ、そこから青い線－黄河－が東の海まで伸びています。また驚いたのは南極と北極があり、大西洋、北海なども今と変わらぬ名称です。しかし、太平洋は大東洋だったり女人国や小人国など、どこか想像し難い名もあります。

清時代にはすでに現在の地図に近いヨーロッパ製の世界地図も知られていて、この図も大西洋や南極・北極が書かれ、一見世界地図風ですが、それにしては余りにもデフォルメが激しく、中国の単独地図と考えた方がよさそうです。江戸時代、地図に対する関心が強まり、中でも中国図は、中国そのものへの強い関心から群を抜いて出版されました。この図もその一つで、出版年としては早い時期のものです。

もう1枚、同じ二人によって筆写され、同時に奉納された朝鮮国図もあります。

㈶古都大宰府保存協会

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121 FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100％再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 ⑳⑥

観世音寺境内の石塔・板碑群

室町時代　観世音寺所在

　観世音寺の講堂と金堂の間に繁るクスノキの根元近くに、板碑や五輪塔の一部だと思われる石が集められています。その多くは５～６百年前の室町時代に作られたものらしく、またほとんどが墓石だったと考えられます。

　このような石塔や板碑は観世音寺ばかりでなく、隣の戒壇院や路傍の大きな木の根元、薮の蔭などにも置かれていますので、今回はこれらに良く見られる特徴をお話しします。

　まず板碑という言葉ですが、本来は供養のために建てられた塔の一種で、板状にした石を使うので板碑と呼び慣わされました。日本に現存するもので一番古いのは鎌倉時代の嘉禄３年（１２２７）製です。造立者は初期においては地方豪族や僧侶でしたが、次第に中産階級の庶民にまで広がっていき、室町時代末に造られた小さな板碑の多くは彼らの墓塔と考えられています。

　板碑の形は図や写真のように頂上を山形に作り、その下に２段の切り込みを入れます。一番広く作っているのが身部で、そこに供養の対象となる仏を像または梵字の種字を刻んで表わし、その下に造立の願文や造立者名、造立の年月日などを刻みます。墓碑の場合は種字の下に法名と没年月日を刻んだ簡単な形が多いようです。

　写真の板碑も小型ながら、種字が刻まれています。ただ下部は割れてなくなっているものも多く、残っているものでも、法名や年紀などの文字は見えません。

　ところで種字というのは密教で仏・菩薩を標示する梵字のこと、梵字とは古代インドの文語であるサンスクリットを表わす文字です。

　板碑には、この文字「[梵字]」キリークを刻むことが多いそうです。キリークは阿弥陀如来を表わします。それは西方極楽浄土に行けるよう願って、その主である阿弥陀如来を刻んだといわれています。また、「[梵字]」サ－観音菩薩、「[梵字]」サク－勢至菩薩を刻んで、阿弥陀三尊で表わすこともあります。写真の板碑も「[梵字]」キリークが刻まれています。

　ほかに写真の板碑の中には五輪塔を線刻したものも見られます。また写真の右端には一つの石で五輪塔を造り出した一石五輪塔もありますが、五輪塔については次回にお話ししましょう。

一般的な板碑の形状

（「文化財探訪８ 石仏と石塔」から）

㈶古都大宰府保存協会

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。　R100

太宰府の文化財 207

五輪塔 - 戒壇院境内を中心として

鎌倉時代後期～江戸時代
観世音寺区所在

▲戒壇院の石塔群

観世音寺や戒壇院、藪陰(やぶかげ)に置かれた石塔の続き、今回は五輪塔についてです。

五輪塔も塔の一形式で、密教において創り出されたものです。下図のように下から方形・球形・三角形・半球形・宝珠形の五つの形を積み上げ、それぞれが地・水・火・風・空の五大を表わすとされました。五大というのは一切の物質に存在し、それを構成する元と考えられているものです。五輪五大の思想は中国でも早くからあったようですが、このような立体的な塔の形は平安時代の中ごろ、日本で作られたものだそうです。

鎌倉時代中期以降は石塔の主流となり、宗派をこえて造られるようになっていきます。そして供養塔のみならず、板(いた)碑(び)と同様、墓塔にも使われるようになります。

五輪塔にも種子(しゅじ)を刻みました。空・風・火・水・地の各輪に対応して、「キャ・カ・ラ・バ・ア」の五大種子がよく刻まれました。

写真の戒壇院の五輪塔にも種子が刻まれているものもあります。ただ、ここに置かれている五輪塔は五つの形がすべてそろって完全な五輪塔を形成しているものはないので、はっきりはしませんが、火輪に「ラ」が刻まれているものがありました。ほかには金剛界四仏の「ウーン・タラーク・キリーク・アク」が刻まれている球形の水輪がいくつか見られます。

観世音寺に残る五輪塔の火輪の一つは五大種子の東方発(ほっ)心(しん)門「ラ」 南方修行門「ラー」 西方菩提(ぼだい)門「ラン」 北方涅槃(ねはん)門「ラク」を各面に配しています。

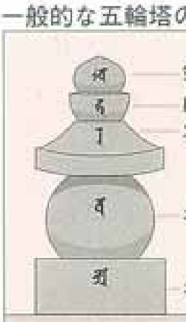
▲観世音寺五丁目の石塔群

最近、観世音寺五丁目の調査でも完全な形のものはありませんでしたが、五輪塔の各部が確認されました。ここでは一番上の空輪・風輪が一石で彫出された空風輪が10基、水輪が7基、火輪・地輪が各1基、板碑が19基ありました。

中でも空風輪の2基は高さが40cmを超え、五輪塔として復元すると全体の高さが2m以上にもなり、市内では珍しい大形の五輪塔として注目されます。これらは室町時代を中心とした墓だと考えられています。また、江戸時代の寛(かん)保(ぽう)2年（1742）に観世村の金平さんが施主となって作った地蔵さんの板碑もあり、今は大きなセンダンの木の下で静かに時の流れを見つめています。

(財)古都太宰府保存協会

一般的な五輪塔の形状



（文化財探訪クラブ⑧「石仏と石塔」から）

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121 FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。
R100

太宰府の文化財 ⑳⑧

伍行の鐘　一口

銅製　江戸時代
総高　50・5㎝　口径　29・4㎝
太宰府天満宮蔵

太宰府天満宮の秋のお祭、神幸式は別名どんかん祭とも呼ばれています。それは行列が太宰府天満宮と榎社の間を下ったり上ったりする時、太鼓と鐘を「ドーン」「カーン」と鳴らしながら行くからです。

写真はかつて神幸式の鐘に使われていた梵鐘です。江戸時代中期の宝暦10年（1760）に寄進されたもので、「伍行鐘」と彫られています。

形式は朝鮮鐘に和鐘を折衷した形で、朝鮮鐘に特有の旗さしと竜頭はありませんが、他は朝鮮鐘の形式を踏んでいます。（図参照）

まず鐘の上端と下端を一周する帯―上帯・下帯には牡丹唐草や飛雲文の変形と思われる文様と、天満宮にちなんで梅鉢文とが巡っています。牡丹唐草や飛雲文は朝鮮鐘によく見られる文様です。

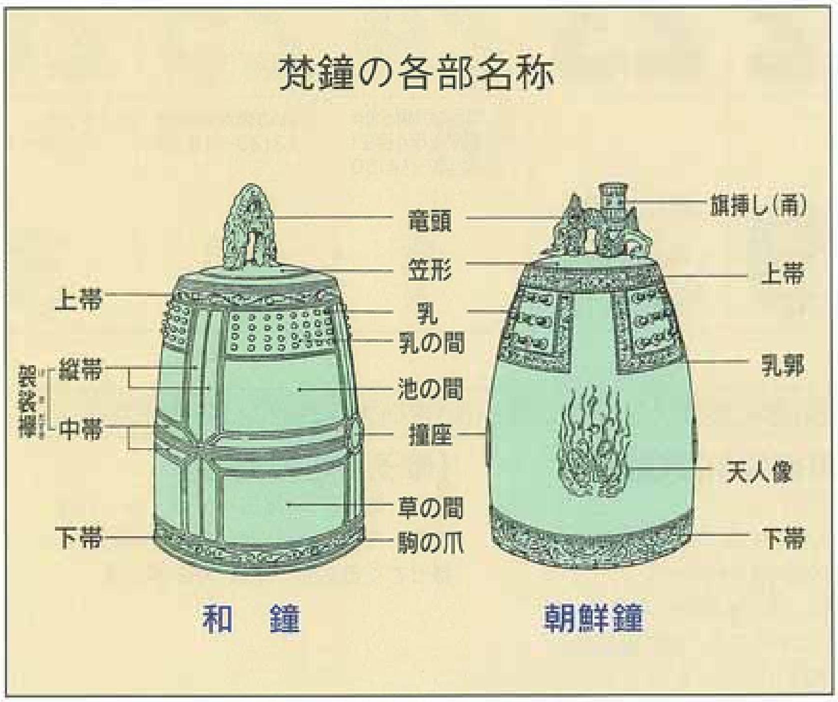
下帯の上、撞座と撞座の間には唐獅子が1匹ずつ鋳出され、江戸時代の趣向を表しています。

乳郭と乳郭の間や唐獅子と撞座の空間には宝暦十年八月廿五日に六度寺の泰賀を取次に伍行鐘が天満宮安楽寺に寄進されたことが線刻され、十一面観音を表す梵字の「キャ」が鋳出されています。十一面観音は天神様の本地仏にあたります。

「伍行」は菩薩が修行する五種の行法―布施（与えること）持戒（戒律を守ること）忍辱（耐え忍ぶこと）精進（ひたすら努力すること）止観（精神を統一し、正しい智慧によって対象を観察すること）を指すと考えられ、五輪塔でお話しした五大とも関係すると言われています。また五行は六波羅蜜（六度）―菩薩が悟りを完成するために行う六種の行―とほぼ同じ意で、その五行の鐘を六波羅蜜の別称六度を寺の名にしている六度寺を仲介に奉納するなど、わずかな銘文の奥に深い意味が含まれていることがわかり、大変興味深い鐘です。残念ながら、今はヒビが入って現役を隠退しています。

(財)古都太宰府保存協会

梵鐘の各部名称



（平凡社「世界大百科事典」より）

太宰府の文化財 ⑳⑨

戒壇院の仏像

戒壇院に残る江戸時代の仏像を紹介しましょう。

木造弘法大師像

像高51・3㎝　玉眼　彩色

▲木造弘法大師像

真言宗の開祖、弘法大師空海の像です。戒壇院は禅宗なのに空海の像が置かれているのも変ですが、これには次のような理由があるようです。

戒壇院は戒律の授戒場として開かれた所なので、江戸時代の再興に当たっても律宗関係の僧の活動が顕著です。中でも真言律系の僧は住持にもなるなど、江戸時代の戒壇院は単純に禅寺とは言えず、律(宗)にこだわったようです。

そのため日本に律をもたらした唐の僧、鑑真の像を祀り、真言律つまり真言宗の祖である空海の像を造って安置したと考えられます。

天明4年（1784）の記録には「脇仏壇右弘法大師木像」「脇仏壇左鑑真律師像」とあり、現在もご本尊の後にある左右の仏龕に鑑真像と対をなして祀られています。

この像は江戸時代の宝暦年中（1751～1764）の作と伝えられています。

木造賓頭盧尊者像

現高50㎝

現在は頭部を失っていますが、左手に玉を載せ、胸骨の表現から賓頭盧さんということが分かります。前記の天明の記録では山門の下に石の地蔵と賓頭盧尊者の像が置かれていますが、その像がこれだと思われます。

賓頭盧尊者は十六羅漢の一人ですが、独立して食堂に祀られることもあり、またなでると病気が治るということから、堂の外近くに安置されることが多いそうです。十六羅漢とは十六人の阿羅漢―仏教の修行の最高段階、またその段階に達した人―で、主に天台宗や禅宗において尊崇されました。

この像は元禄5年（1692）から正徳5年（1711）の間、戒壇院の住持であった運照の代に造られたと伝えられます。ちなみに山門は元禄14年（1701）に建立されています。山門がなくなった後は本堂に移されたようです。

木造観音菩薩坐像

像高79・7㎝　玉眼　漆箔

▲木造観音菩薩坐像

江戸時代半ばごろの像と思われ、ふくよかな顔だちや端正な彫出など、京仏師の作と考えられています。しかし伝来については現在のところ、記録になく、他の寺から移された可能性もあるそうです。

㈶古都大宰府保存協会

太宰府の文化財 ⑵⑽

大野城太宰府口城門跡

特別史跡大野城跡内
西暦665年

▲林道の方（城内）からのぞいた太宰府口城門跡（写真提供：九州歴史資料館）

▲太宰府口城門復元図（第Ⅰ期、城外正面から）
（資料提供：九州歴史資料館）

太宰府市の北にある四王寺山（標高410ｍ）には、西暦の665年に築かれた山城、大野城の跡があります。

馬蹄形にめぐる尾根に沿って土塁（土をつき固めて積み上げる工法で築いた城壁）を巡らし、谷は石垣を築いて、山頂一帯を広く囲み、城としました。朝鮮半島にあった三国の抗争の影響で北部九州を中心に防衛体制を早急に整える必要があったからです。

城の構造としては、城壁にあたる土塁や石垣の長さは約6・5キロで、北側と南側は二重になっています。城門は北に1カ所、南で3カ所が見つかり、城内には平坦地を利用して建物が建てられていました。現在までに8カ所、約70棟分の建物の礎石が見つかっています。建物のほとんどは米や武器を収納していた高床の倉庫と考えられています。

以上が大野城の構造ですが、今回は南の城門の一つ、太宰府口城門跡について話します。

太宰府口城門跡は多くの人が四王寺山の頂上と思っている焼米ヶ原のそばの谷にあり、太宰府から上って来た林道から右手下をのぞくと写真のように門跡が見えます。昭和60年から63年まで遺跡の整備のための発掘調査が行われ、次のようなことが分かりました。

門は少なくとも2回建て替えられている、つまり3時期に分けられる門があったということが分かりました。第Ⅰ期は掘立柱式の城門で、梁行（奥行）約9ｍ×桁行（横）9ｍの建物であったと推定されています。幸いにも柱に使われたヒノキの一部（柱根）が残っていて、その年輪で年代を測定したら、648年＋αという、大野城築造の年代にとても近い、大変興味深い結果が出ました。

その掘立柱の城門が礎石を使った城門（第Ⅱ期）に建て替わります。写真に見える2列に並んだ礎石がそうです。その時期は8世紀の初めと思われ、規模は少し小さくなって、約5ｍ強四方の櫓門風の門だったと考えられています。

第Ⅲ期のものはこのⅡ期目と建物規模は同じですが、石垣に繋がる両袖部分を改変しています。そして鏡や鋤先など鎮壇具に使ったと思われる物が出土しました。

四王寺山に登山の折は1350年前の山城の様子がよくわかる太宰府口城門跡をのぞいてみてください。

㈶古都大宰府保存協会

この広報紙は、地球環境保全のため100％再生紙を使用しています。 R100